

〔宋元と高麗—東洋古典美の誕生—展によせて〕

「煙寺暮鍾図」

(大和文華館蔵)と北宋絵画の遺光

熙寧四年(1071)北宋へ復貢した高麗は、それ以降多くの文物を北宋から受け取っていきます。熙寧七年(1074)には国子監の九經および史子諸書が高麗に売下され、元祐元年(1086)には北宋朝の文化事業の一大成果たる大型叢書『文苑英華』が、また元祐七年(1092)には『冊府元龜』が下賜されました。また熙寧九年(1076)には入貢した進奉使崔思訓に対して、開封大相国寺の壁画を模写させることが勅許されます。大相国寺は国家の大寺であり、その壁画の模写は特別な意味をもったと言えるでしょう。

このようななか、熙寧七年のことと思われるが、高麗に郭熙画「秋景烟嵐二図」の下賜が行われます(『林泉高致』画記)。郭熙は北宋中期の画家で神宗の寵愛を受け、当時「禁中の殿閣は尽く」「郭熙一手」になったと言う画家でした。当時高麗がこのような北宋の文化的資源を多く受け取ることが出来たのは、特別な文化的恩典であり、そ

の背後には北宋が敵対する北方の帝国・遼との政治的緊張のもとおこなった、高麗への対遼懐柔政策があったと考えられます。このように北宋から下賜された文物はさらに、天章閣、清燕閣といった高麗宮廷の施設で群臣に公開されることで国内外に親宋政策を顕示する役割を果たしたのです。

さて、このような政治的背景の下に高麗に伝来した郭熙画ですが、その後の朝鮮半島では郭熙画風が多く伝えられています。「乙未」(1235年)銘をもつ「羅漢像」(大和文華館蔵、前頁挿図)の岩坐が郭熙風に描かれているのはその非常に早い例です。郭熙の作品としては『早春図』(熙寧五年(1072)、図4)がありますが、その構図の特徴と『煙寺暮鍾図』(朝鮮王朝時代前期、大和文華館蔵、図5)を較べてみると、多くの類似点が見つかります。

まずは構図です。『煙寺暮鍾図』は中央に主山があり、左手には水上に沿って視界がひらけていきます。

画面中央下の懸崖には船が繋がれ、人の活動を表していますが、同じく『早春図』でもこの場所には船から岸に上がる人が描かれ、大きな山水のなかで人事を感じさせる見所の一つとなっています。

『煙寺暮鍾図』には中央の大きな岩塊に抱かれるように樓閣が描かれ、それによりそうように瀧が流れ落ちています。瀧壺を俯瞰するような視点から描き、観者に雄大な感覚を与えることも『早春図』と共通するといえるでしょう。

また、『煙寺暮鍾図』には岩塊上にすくつとびる二本の松が描かれます。このような二本の松(双松)は郭熙画の大きな特徴であり、『早春図』にも描かれています。注目すべきは、『煙寺暮鍾図』は双松の手前を濃墨、後ろを淡墨で描き、おそらくは夕霧が降りてくる一瞬を描き出そうとしていることです。なるほど双松の背後にはすでに霧に霞んだ樓閣がわずかに姿を見せていますから、画家はここで山々を包み込む空気の厚みを描き出そうとしているのでしょう。このような大気の表現は『早春図』にも見られ、『煙寺暮鍾図』の画家はこのような郭熙画の、水墨で大気を描き出そうとする宋代絵画の大きな特徴を継承していると言えるでしょう。

『煙寺暮鍾図』にはもう一つの古

い要素があります。それは画面左下にある一本の斜線です。このような斜線を引いて一端視界をさえぎり、それによってさらに奥へと続く遠近感を出そうとする試みは、おそらく遼代の木扉(図1)のような初発的な表現から始まり、李成「喬松平遠図」(図2)や趙孟頫「重江疊嶂図卷」(図3)のように、李郭派と呼ばれる絵画に多く継承されていきます。

しかし『煙寺暮鍾図』にはより新しい表現も試みられています。左側をより大きく開けて視点を誘導すること、後ろの遠山が画面に浮かぶように表現されること、切り立った弧線状の皴法がなされること、そして主山上部に平台と呼ばれる白く塗り残された部分があることなどです。平台は『早春図』では光の反射として表現されており、『煙寺暮鍾図』ではむしろ山のかたちの面白さに重点が移っていくようです。以後朝鮮半島の山水画は多様な表現をとっていきますが、構図やその表現意図を含めて『煙寺暮鍾図』は、これらの表現の原点ともなる北宋絵画の記憶を深くとどめた山水であると言えるでしょう。(塚本庸充)

(図1はGilded Splendor, Asia Society, 2006、図2, 3, 4は『世界美術全集 東洋編』小学館から転載させていただきました。)

図1



図2



図3



図4



図5



図1 林西県博物館蔵(内蒙古自治区) 氐鋪遼墓出土、11~12世紀 図2 李成「喬松平遠図」澄懷堂美術館 図3 趙孟頫「重江疊嶂図卷」(部分)台北・故宮博物院
図4 郭熙「早春図」台北・故宮博物院 図5 伝安堅「煙寺暮鍾図」大和文華館

季刊 美のたより No.161

平成20年1月5日

発行 大和文華館